



金葉和歌集

特別  
イ 4  
3163  
13



24  
3163  
13



あつた  
の  
あつた  
の

人しれぬ  
ゆき

あつた  
あつた  
あつた

あつた

あつた  
あつた  
あつた

あつた

あつた

五 九	四 三	三 八	二 九	一 三	〇 〇	九 九	三 六	二 九	一 七	〇 六	二 五	二 〇	三 七	一 八	一 七	二 八	一 〇	一 九	七 二	五 〇	五 〇	四 〇	三 〇	二 〇	一 〇	〇 〇	國 歌
な 二	り の	や ま	か し	ふ く	し し	わ が	か せ	あ と	か は	い ま	あ き	あ き	つ き	ふ ぢ	ほ と	ゆ の	ゆ の	し し	さ の	ち の	や ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	大 観 東 三 十 一 首
え と	え と	え と	か せ	く の	せ ば	こ は	は み	に に	は に	は し	あ き	あ け	あ け	う ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	あ ま	
あ ま																											

二條象  
金葉集

棟原製



二陳家  
圖書

陳家

陳家

金葉和歌集卷第一

春部

始行信滿内百首有り  
春乃心花よみ侍り



修理大夫頭季

うらるる心花よみ侍り

春宮大女公實

春宮大女公實

藤原政仲卿

はつらつ心花よみ侍り

皇后宮妃

はつらつ心花よみ侍り

百首有り

藤原宮内

春の心花よみ侍り

心花よみ侍り

太宰大貳長實

はつらつ心花よみ侍り

心花よみ侍り

修理大夫頭季

あつむのむねは〜とあるは〜は初雪に〜とあるは  
也ー 春宮大臣公實

御所の書式〜とあるは〜は初雪に〜とあるは  
實行の家乃許合〜とあるは〜は少物云教母

いふまじ〜とあるは〜は藤原政輔御前

このふか〜とあるは〜は太宰大臣長實

おのまじ〜とあるは〜は

百首許中〜とあるは〜は  
修理大臣政季

萬乃き〜とあるは〜は  
〜とあるは〜は

春宮大臣公實

ふつち梅乃ら枝〜とあるは〜は  
じつ川のいり〜とあるは〜は

藤原政輔御前

〜とあるは〜は初雪に〜とあるは〜は  
〜とあるは〜は







源朝とよむ

海原経世

いよなとく越後よりかりこひとふねのちかぢい

花薰用といふ事なむ

攝政左大臣

吉野山家めはくも候わくそとりの里し白くまふ

白河院花屋清書

新院御製

そこのはく我もむ約くといふ我はらうい白く

大政大臣

ちく川乃まきいさち富五れも乃白くゆい

入のむらさき

大宰大貳長實

いふもむらさきいさち富五れも乃白くゆい

結賢門院共衛

いふもむらさきいさち富五れも乃白くゆい

源雅憲

いふもむらさきいさち富五れも乃白くゆい

宇治藤太政大臣高橋家乃白くゆい

行方 院御製

いふもむらさきいさち富五れも乃白くゆい

遠山松

春宮友久公貫

遠山松の影をみれば春宮の御影も

松岡松の影をみれば春宮の御影も

内大臣

春宮の御影をみれば遠山松の影も

右兵衛督実成

春宮の御影をみれば松岡松の影も

花為春友の御影をみれば松岡松の影も

内大臣

春宮の御影をみれば松岡松の影も

新伝抄方と花契歴年と松岡松の影も

待賢門院中納言

春宮の御影をみれば松岡松の影も

藤原孫輔朝臣

万代の御影をみれば松岡松の影も

終日壽花の御影をみれば松岡松の影も

源貞亮朝臣

白雲の御影をみれば松岡松の影も

松岡松の御影をみれば春宮の御影も

はるしつちりろよかりにまじりてはあま  
そつしちりけろよ女房よかろくよま  
けり  
堀河院御製

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
源師後御

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
山たをそちりよかりにまじりてはあま

大宰大臣長實

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
藤正のつちりろよかりにまじりてはあま

藤正のつちりろよかりにまじりてはあま  
藤正のつちりろよかりにまじりてはあま

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
よきつちりろよかりにまじりてはあま

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
よきつちりろよかりにまじりてはあま

伊理者大臣季

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
よきつちりろよかりにまじりてはあま

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
よきつちりろよかりにまじりてはあま

大宰大臣長實

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
よきつちりろよかりにまじりてはあま

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
よきつちりろよかりにまじりてはあま

宮内省攝津

よきつちりろよかりにまじりてはあま  
よきつちりろよかりにまじりてはあま

源後頼朝

心く候初いふは井いの田いの路いをい経いるい縁い

大藏卿住房

藤原定隆

心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い  
昔い野い郎いのい心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い  
河い院い時い阿い南い夏いのい心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い  
心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い

常母言孫お乳母

考いへいばいあいらいわいるい心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い

僧正尊

心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い  
後い冷い泉い院い時い阿い南い夏いのい心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い  
心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い

月前いのい心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い

大藏卿住房

心いくい候い初いふいはい井いのい田いのい路いをい経いるい縁い

秋香の家少く櫛子十人入へては  
縁のりいさき 大室大威長貴

春の夜は花の影をうらみし  
水と落花の影をうらみし

源雅実卿

花の影をうらみし  
落花の影をうらみし

右兵衛長貴卿

春の夜は花の影をうらみし  
水と落花の影をうらみし

源後頼朝

春の夜は花の影をうらみし  
落花の影をうらみし

長貴卿

春の夜は花の影をうらみし  
落花の影をうらみし

右兵衛長貴卿

春の夜は花の影をうらみし  
水と落花の影をうらみし

大納言信信

水乃花若らるる川に井のつららるる

藤原成海御下

あ乃而あつしたをみつらるる  
落前夜より事なごらる

飯原水貫

あふはく一見を許らるる神乃お世物  
堀河院治時御也乃あはるる  
かまきら物ゆわく一丁申せ給へ中  
宮乃治方いまつら給許るる言治院一七言  
よよとねほやとありかへん

清原殿

はく見まはるるまらるる昔野乃  
た乃あつらるるあはるる

柳若門信安殿

花乃花の粉よあはるる  
花乃あつらるる事なごらる

隆源治時

夜乃あつらるるあはるる  
まのあつらるるあはるる

高階信成御下

機石山田とほくろのむらさきとくもむらさきとくも  
後冷泉院の母のあつらふら東女房から  
とくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさき  
むらさきとくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさき  
くろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさき  
下野やあつらふらとくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさき  
とくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさき  
あつらふらとくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさき  
むらさきとくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさきとくろのむらさき

下野

新院山田とほくろのむらさきとくもむらさきとくも

新院山田とほくろのむらさきとくもむらさきとくも

中野

おろのむらさきとくもむらさきとくもむらさきとくも

おろのむらさきとくもむらさきとくもむらさきとくも

権僧正

おろのむらさきとくもむらさきとくもむらさきとくも

おろのむらさきとくもむらさきとくもむらさきとくも

経理

おろのむらさきとくもむらさきとくもむらさきとくも



妻乃國より

大納言経信

あつたてにうらなひをまゝに申すに  
ついでに

苗代

津守國基

あつたてにうらなひをまゝに申すに  
ついでに  
後冷泉院御時弘殿及女侍御時合  
苗代

有原隆實

あつたてにうらなひをまゝに申すに  
ついでに  
家の子をいふに  
はつたてにうらなひをまゝに申すに

中絶言推定

ついでにうらなひをまゝに申すに

水邊歎冬

攝政左大臣

あつたてにうらなひをまゝに申すに

太宰大貳長貴

あつたてにうらなひをまゝに申すに  
後冷泉院御時合

第太宰大貳長房

あつたてにうらなひをまゝに申すに  
後冷泉院御時合

攝政左大臣

入りて中へ父く其草舟の多しをいふとていふくうく  
院の西へく橋とあるといふものなる

古く典傳

多しをいふとていふく其草舟の多しをいふとていふく

藤花といふもの

有原の藤花

いふく其草舟の多しをいふとていふく

房の友のいふく其草舟の多しをいふとていふく

律抄の増寛

いふく其草舟の多しをいふとていふく

紫藤花の松といふものなる

良澤の藤花

いふく其草舟の多しをいふとていふく

二條の白家といふく其草舟の多しをいふとていふく

大納言の信

いふく其草舟の多しをいふとていふく

百々河の藤花といふものなる

経理の藤花

いふく其草舟の多しをいふとていふく

右の藤花といふものなる

神祇の藤花

あつたにむらさきあはれまはるる  
藤家藤範とてしるまはるる

内大臣家越後

あつたにむらさきあはれまはるる  
三月書りてしるまはるる

大僧都澄観

あつたにむらさきあはれまはるる  
中納言雅成

あつたにむらさきあはれまはるる  
三月書りてしるまはるる

内大臣

あつたにむらさきあはれまはるる  
攝政大臣家とてしるまはるる  
源後頼朝

あつたにむらさきあはれまはるる  
重張とてしるまはるる  
藤原朝頼

藤原朝頼

あつたにむらさきあはれまはるる  
藤原朝頼

金葉和歌集卷第二

夏部

卯月万乃日文交の成なる

源帥賢朝臣

秋乃さういふまにさむらひの心はひびくを春を打母に身は  
二條開白鳥家ゆゑ人の解れ乃成なる

ゆゑなるよ

藤原威方

夏山の青ささしめよとて梅の枝にむらさき  
應徳元年内裡ゆく梅結葉とて  
よとせ計るる

院御製

よとせ計るる梅の枝にむらさき  
大納言経信

鳥羽後より評しめしむるは如たなる  
鳥羽後より評しめしむるは如たなる

言はくは公實

雪乃もさういふまにさむらひの心はひびくを春を打母に身は  
卯た陣場とて言はくは公實

大納言経信

卯た陣場とて言はくは公實

卯花とよき 江侍従

雪とゆきよしの卯花とよき 権左大臣

うらぶきの卯花とよき 権左大臣

中納言實行

卯花とよき 大納言経行

志保の卯花とよき 鳥羽後深院 卯花とよき

信理右大臣歌子

又卯花とよき 卯花とよき

藤原部信

卯花とよき 卯花とよき

攝政左大臣

卯花とよき 卯花とよき

源雅定

卯花とよき 卯花とよき

何事と云ふ心はよき事と云ふ心は  
よき事

郭公の心はよき事と云ふ心は  
長實御家評合の御事と云ふ事

右京右大臣

郭公の心はよき事と云ふ心は  
郭公の心はよき事と云ふ事

内大臣

郭公の心はよき事と云ふ心は  
時を待たぬ事

藤原政通

郭公の心はよき事と云ふ心は  
兼勝二内内裡三合の郭公の心は  
よき事

藤原孝言

郭公の心はよき事と云ふ心は  
子親と云ふ事  
指僧の永清

郭公の心はよき事と云ふ心は  
人の子と云ふ事

源後頼朝

郭公の心はよき事と云ふ心は

郭公驚夢とつらき事なる

中絶言實行

おもしろき夢ありては夢をまじへてつらき事なる  
待子親とつらき事なる

院法製

郭公の夢のつらき事なる  
後述の家評合なる

二條南白家評

約人の宿とつらき事なる  
中絶言實行

おもしろき夢ありては夢をまじへてつらき事なる

郭公の夢

藤村院評

宿人の夢とつらき事なる  
中絶言實行

おもしろき夢ありては夢をまじへてつらき事なる  
宇治藤村院評合なる

康資王母

おもしろき夢ありては夢をまじへてつらき事なる  
匡房の義懐守に  
つらき事なる

中原高直

いへりしにわがしるしに  
時鳥のこゝろ

有原成世部下

かゝるにふしに  
月苅子親

皇后宮式部

あはれに  
院園部

源定信

いへりしにわがしるしに  
源定信

源定信

源定信

いへりしにわがしるしに  
源定信

源定信

源定信

いへりしにわがしるしに  
源定信

源定信

源定信

いへりしにわがしるしに  
源定信

源定信





あつたまのこゝろをいふに我々の心は

あつたまのこゝろ 赤城の頼

あつたまのこゝろをいふに我々の心は

藤原定通

あつたまのこゝろをいふに我々の心は

権中納言後深の家評合のあつたまのこゝろ

藤原仲頼

あつたまのこゝろをいふに我々の心は

あつたまのこゝろ

左兵衛督實純

あつたまのこゝろをいふに我々の心は

三官

あつたまのこゝろをいふに我々の心は

攝政左大臣家とあつたまのこゝろ

神祇伯仲

あつたまのこゝろをいふに我々の心は

権中納言後深の家評合のあつたまのこゝろ

藤原政綱

あつたまのこゝろをいふに我々の心は

攝政左大臣家とあつたまのこゝろ

源雅光

夏衣の事  
實行の家評合、夏衣の事

源雅光歌

夏衣の事  
夏衣の事

水月院涼

源俊賴歌

風平の事  
風平の事

照射の事  
源仲光

風平の事  
風平の事

神祇伯歌

神祇伯歌  
神祇伯歌

中地言後

中地言後  
中地言後

白着評中  
白着評中

考官志公實

考官志公實  
考官志公實

二條岡白家  
二條岡白家

源俊賴歌

源俊賴歌  
源俊賴歌

實行の家行合十鶴のひのひをよめる

中納言雅定

大井のいんせいのひのひをよめる

夏月をよめる

源親房

玉のひのひをよめる

秋の節をよめる

はるのひをよめる

掃政大夫

ふる月をよめる

公實の家をよめる

藤原基俊

ふる月をよめる

秋陽をよめる

中納言頼隆

ふる月をよめる

秋の節をよめる

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

金葉和詩集卷第三

秋部

百三十一 秋の夜

春の夜と公實

三つふ吹又く秋の夜多き秋の夜は

野草の露も秋の夜は

大宰大貳長實

まらふも秋の夜は

秋の夜は

秋の夜は

五内

秋の夜は

秋の夜は

秋の夜は

秋の夜は

秋の夜は

秋の夜は

秋の夜は

秋の夜は

秋の夜は

あはれに御書に御返事申上り候へば

中納言信

申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

御返事

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

御返事申上り候へば

ふりつちかきまゝくちかきまゝの暮るるつちかきまゝ  
田家早秋とくちかきまゝの暮るる

右桑葉書伊也

つちかきまゝの暮るるつちかきまゝの暮るる  
山里秋とくちかきまゝの暮るる

藤原行感

つちかきまゝの暮るるつちかきまゝの暮るる  
師賢朝臣乃梅津乃山里一人とくちかきまゝ  
田家秋とくちかきまゝの暮るる

大納言経信

つちかきまゝの暮るるつちかきまゝの暮るる  
つちかきまゝの暮るる

大納言経信

つちかきまゝの暮るるつちかきまゝの暮るる  
つちかきまゝの暮るる

藤原忠隆

つちかきまゝの暮るるつちかきまゝの暮るる  
月夜富友とくちかきまゝの暮るる

はつちかきまゝ

つちかきまゝの暮るるつちかきまゝの暮るる

周世宗皇帝御筆

取仲之文

わろふふ草紙の家はたす井とて世にたすむる

翫の月とて事なほ

若中御言伊房

つはらうとてあつたふ月影をいせむる人

鳥羽殿とて接宿の事なほ

孝宣公公實

秋ういあつたふ草紙の家はたすむる

寛治の正月十日とて事なほ

月とて事なほ

信守御書

海よりとてあつたふ月影をいせむる

大御言経信

とてあつたふ草紙の家はたすむる

翫の月とて事なほ

臣の忠教

つはらうとてあつたふ月影をいせむる

後冷泉院御書

藤原隆経御書

藤原隆経御書



いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

野原の如く、さかすか

源仲正

かたじけなく、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

源親房

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

源仲正

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

源俊賴

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事

いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事、  
いふ事なりやと申すは、その旨の如く、新しき事



秋月如畫とらうとをよめる

藤原隆経卿

菊のこゝろを多りきばくちのこゝろに秋の如くはなれり

院の月こゝろにをよめる

源行宗朝

あつたをいふは秋の如くはなれり

平師季

川流の如くは秋の如くはなれり

平師季

あつたをいふは秋の如くはなれり

あつたをいふは秋の如くはなれり

藤原忠隆

あつたをいふは秋の如くはなれり

藤原隆経卿

院の月こゝろにをよめる

あつたをいふは秋の如くはなれり

院の月こゝろにをよめる

あつたをいふは秋の如くはなれり

院の月こゝろにをよめる

大納言経信

考り出さるる所は月影をせりの川をりあらりくま  
秋季の家しく九月十日申入の御書に

大宰大貳長實

書にまきと縁とみゆの月影の心はゆかぬ人あはる

後頼朝

かきと縁とみゆの月影の心はゆかぬ人あはる

右原家経朝

かきと縁とみゆの月影の心はゆかぬ人あはる

月影古橋とゆかぬ人あはる

三首

かきと縁とみゆの月影の心はゆかぬ人あはる

水に月影の心は

藤原実光朝臣

月影の心はゆかぬ人あはる

大宰大貳長實

かきと縁とみゆの月影の心はゆかぬ人あはる

永承四年殿と評合上月の夜より

右原家経朝

かきと縁とみゆの月影の心はゆかぬ人あはる

月落採宿のしるしとて

修理大夫啓

松の心はこゝろのしるしとて  
こゝろのしるしとて

藤原有教母

あしき心はこゝろのしるしとて  
行路暗月のしるしとて

指僧正水縁

おもしろきはこゝろのしるしとて  
對山待月のしるしとて

中納言啓

おもしろきはこゝろのしるしとて  
おもしろきはこゝろのしるしとて  
おもしろきはこゝろのしるしとて

平康威後

おもしろきはこゝろのしるしとて  
おもしろきはこゝろのしるしとて

後頼朝下

おもしろきはこゝろのしるしとて  
おもしろきはこゝろのしるしとて

はつと女

藤村院六條

房一ふと女をうむるに藤村院の御女をうむる

はつと女

歌仲女

はつと女をうむるに藤村院の御女をうむる

藤村院

藤村院の御女をうむるに藤村院の御女をうむる

藤村院

春宮女公實

藤村院の御女をうむるに藤村院の御女をうむる

藤村院

三宮女進

藤村院の御女をうむるに藤村院の御女をうむる

藤村院

皇后宮右衛門侍

藤村院の御女をうむるに藤村院の御女をうむる

藤村院

内大臣家越後

藤村院の御女をうむるに藤村院の御女をうむる

藤村院の御女をうむるに藤村院の御女をうむる

藤村院

源雅光

此の二れは都意一以接のち唐の〇一由人おのり  
高の三〜〜〜

藤原政輔卿

母と秋と好むは〜乃の〜  
野花帯露と〜

實后宮御母

ち〜考と〜人〜  
太皇太后宮乃御合一人〜  
又〜

僧正行傳

小蘇原にり〜

秋をよめる

大宰大貳長實

ち〜乃〜

女郎た〜

隆源法親

〜  
政隆の家〜

中納言俊忠

〜  
女郎花〜

女郎花〜

藤原政隆卿

〜  
〜

攝政左大臣

とまきしはさかひていそひくものあまのあまの  
攝政左大臣家あまのあまのあまの

藤原季常

たかひつゝしつゝいそひくものあまのあまのあまの  
蘭のあまのあまの左大臣家あまのあまの

沖根伯秋仲

かろくぬいしつゝいそひくものあまのあまのあまの  
はまの縁乃らちあまのあまのあまのあまの  
鳥羽後藤家合い一節記乃ちあまのあまの

春宮左大臣實

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
野た苗入りしつゝいそひくものあまのあまの

平忠盛幼少

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

源俊頼卿

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

藤原基光



宇治川乃のせよとて父事いし父島入舟とて  
都芳門院根合の菊とよめる

中納言通俊

しらのちの菊とよめる  
多羽友菊歌合の菊とよめる

源仲實卿

子とて君ははつと菊とよめる  
攝政左大臣家とて菊とよめる

源仲實卿

賜の井とてはつと菊とよめる

兼勝二年、内裡三合よ菊とよめる

源仲實卿

とてはつと菊とよめる

宇治兼勝大臣大井友と菊とよめる  
とてはつと菊とよめる

大納言通俊

大井友と菊とよめる  
大皇太后を扇合よ菊とよめる

源仲實卿

とてはつと菊とよめる

落葉のころ

藤原伊家

谷川にちる文子の龍田作家世よりわ

大井の乃清世の流るるけり

経理大友歌季

大井の乃清世の流るるけり

源上紅葉のころ

大絶言経任

心もあはれなるころ

紅葉のころ

神祇伯歌仲

かきぞ

大井の乃清世の流るるけり

大井の乃清世の流るるけり

ころ

藤原伊家

柳あはれなるころ

落葉埋揚のころ

経理大友歌季

大井の乃清世の流るるけり

落葉蔵水のころ

大井の乃清世の流るるけり

大井の乃清世の流るるけり

落葉在月のころ

大宰大貳長實の母

久少ふみしむのちからとて同ろむのころにせむ  
九月盡ろむをよめる

中原經則

あまのついでにむすむのちをなむけよりいんせむ

源後頼朝

茶の葉よとくぬきむらあやもかみよまむむせむ  
九月盡ろむ大井のあつらひをよめる

長實の母

けしきも同方ろむらんとあそむるにせむせむせむ  
ちかひ

全歌和評集卷第廿

各部

兼曆二年、市部とて、爲らば、その、  
歌、を、か、り、て、平、は、ら、ま、り、つ、ら、し、  
ま、り、し、つ、ら、し、つ、ら、し、

源仲賢卿

神身月、く、も、ま、り、つ、ら、し、つ、ら、し、  
後二信藤原親子家造紙合、  
つ、ら、し、  
修理者、  
つ、ら、し、

奈良山、く、人、く、百、く、ま、り、つ、ら、し、

つ、ら、し、

指傳、  
つ、ら、し、

山、川、乃、水、を、海、く、り、く、つ、ら、し、  
攝政家、  
つ、ら、し、

神身月、何、乃、あ、り、つ、ら、し、  
後、未、在、位、法、何、は、お、り、つ、ら、し、  
つ、ら、し、  
つ、ら、し、

つ、ら、し、  
大井、何、く、あ、り、つ、ら、し、  
つ、ら、し、

平致親

大井向よりとてわろ幾せきかゝり論とけしとて

落葉をよめる 大納言経信

みひら山からさししとて人のまけり小巻と綴り也

竹筒似るさしとて事よめる

藤中納言経信

あま竹のよも我神をよめしとてあまのよも

十月十日のよも神のよもさしとてよめる

はる光清

大井向よりとてわろ幾せきかゝり論とけしとて

落葉をよめる 大納言経信

源後頼朝

あまのよも我神をよめしとてあまのよも

十月十日のよも神のよもさしとてよめる

あまのよも我神をよめしとてあまのよも

十月十日のよも神のよもさしとてよめる

大納言経信

あまのよも我神をよめしとてあまのよも

十月十日のよも神のよもさしとてよめる

あまのよも我神をよめしとてあまのよも

十月十日のよも神のよもさしとてよめる



いひつゝ雪後わしきしはる家文子あまのこのまゝ

宇治藤太政大臣乃家評合い一雪乃ゆき乃の

ふゆ家 源頼朝よりのちか

なまのこは雪後わしきしはる家文子あまのこのまゝ

楊やう初雪はつゆきのころをふゆ家

藤新ふじにん信尾張のぶおわり

ちの雪乃ころわらしきしはる家文子あまのこのまゝ

初雪はつゆきのころをふゆ家 大細言おほこまご鐘信かねのぶ

ふゆ家の梅のまゝ一ころわらしきしはる家文子あまのこのまゝ

雲中うも鷹狩たかとりのまゝ家

源道隆よしのり

あまのこは雪乃ころわらしきしはる家文子あまのこのまゝ

鷹狩たかとりのまゝ家

源後頼朝よりのちか

あまのこは雪乃ころわらしきしはる家文子あまのこのまゝ

内うち家いへ越こ後のち

あまのこは雪乃ころわらしきしはる家文子あまのこのまゝ

何なにの雪ゆき中ちゆうのまゝ家いへふゆ家

大藏卿だいざうけい匡房けいぼう

あまのこは雪乃ころわらしきしはる家文子あまのこのまゝ

宇治藩大政大臣家語合ト所の文ノなる  
皇太后御書

少雪の松乃若葉の心  
中納言女ト

しつらつら松の雪の心  
大書書主基方備中因孫其心ト

藤原行盛

雪の心松乃若葉の心  
源俊賴ト

文の心松乃若葉の心

雪乃若葉の心

あいの松乃若葉の心

皇太后御書

いとふしの心松乃若葉の心

百の語

隆源ト

林の雪乃若葉の心

皇太后御書

乃若葉の心松乃若葉の心



閑子の親の  
こけりよはしおのちか  
きつらゆいりさるるも  
なごよきくきりら

藤原兼房卿

家経の  
あそびは  
家経の  
あそびは

兼房の

あそびは  
源雅光

あそびは  
あそびは  
あそびは

あそびは  
あそびは  
あそびは

三言

あそびは  
あそびは  
あそびは

あそびは  
あそびは  
あそびは

あそびは

あつたてのうらな  
あつたてのうらな

中野國信

あつたてのうらな

中野國信

あつたてのうらな

川口

あつたてのうらな

あつたてのうらな

あつたてのうらな

藤原成成

あつたてのうらな

あつたてのうらな

あつたてのうらな

藤原成成

あつたてのうらな

あつたてのうらな

由大旨

あつたてのうらな

あつたてのうらな

藤原成成

金家私評集卷第五

賀言

長治二年三月ある内裡ゆく竹不改

とらしをよまふ終る

堀河信清製

系代書と信清の作とある世の世なり

郁若門信根合と祝ふをよま

六條右大臣

万代とまをせりしとありきかう御花君と

堀河信清時中官愛用堀河信清相

御直よりつらしき御事

大納言後實

水角に松乃葉ののびらおきいりせとほつらつら  
於禁中 翫花といつらしき御事

中納言實行

おろしよきし自入重櫓のしきりきり  
花契遊自といつらしき御事

源氏後朝

万代にきりきりしきりしきり  
梅後朝御自家評合といつらしき御事

藤原國行

をのけしつらしき御事  
百と評中といつらしき御事

源後頼朝

君代に松のしきりしきり  
祝の心をいささ

大納言経信

きりきり代に松のしきりしきり  
後保後朝御自家評合祝の心を

永成頼朝

君代に松のしきりしきり  
をのけしつらしき御事

素系二正三月易好まじき一也いたは  
しつしをよむせけり

坂田清親

清乃北流古く自山極花子もあし子ひまはく  
大尊會主基方辰の音音都鼓山を  
よむ家  
藤原行威

悠比方朝のつをよむ家  
藤原敦光

よむ家  
藤原敦光

己日樂破仁雄翠今つをよむ家

相乃とと乃甲しかしをねまはつはけ都いよむ  
後冷泉院法時大尊會主基依中園二万  
つをよむ家  
藤原家經

つをよむ家  
高階明頼

苗代乃水さつ井とまをせり氏たけら君は清  
祝乃家よむ  
曾原ら照

つをよむ家

花契御年一とる事をよする

大宰大貳長實

都より君らにせよと申すに申す事多し  
掃部大臣申すに此等此等使し  
くりゆらるる為隆の事并しゆらり  
はらへり

周防守

くつら神武天皇の御代に  
部

藤原道隆

君代といふ方に代かあるに貫く  
宇治苗太政大臣家評合に祝をよする

中納言通俊

君代といふ方も御代といふ祝う  
大藏卿正房

きんぐもあつたむしみる上  
新保の御代藤原久白とらるる

七次曲代

君代といふ方も御代の祝う  
祝のいよする

源忠季

君代といふ方も御代の祝う  
實行の家評合に祝をよする

藤原為忠

高田のふじのうらふ君の代はあはれに神代をささげん  
藤原のまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃  
うらふゆきまこと六条右大臣のうらふ  
宇治藤原のうらふ

也

六条右大臣

雪乃のうらふまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃  
はまのうらふまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃  
天壽のうらふまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃  
新なる  
後冷泉院のうらふ

かみまの真砂のうらふまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃

ねとまのうらふ

源頼家卿

万代のうらふまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃  
藤原のまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃  
石あまのうらふまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃

源後頼朝

かみまのうらふまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃  
かみまのうらふまことさくさくうらふまことせけりよ雪乃

金葉和詩集卷第六

別部

豊房細良丹後守

とら

大納言経長

君もたぬ部ももまふもさくもはたすも

や

海原豊房節下

よはるもきくもくもろはるも長つねも若もあつ

重吾時らつてくもりくも人か談しむら

あ

堀川忠忠節

るもくもたぬもあもさもはるもあつてはるも

部

とら

よはるもきくもくもろはるも長つねも若もあつ

経補はくもくもろはるもよはるもあつてはるも

らりよはるもあつてはるもあつてはるも

若大貳長房細良

よはるもきくもくもろはるも長つねも若もあつ

たはるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも

とら

よはるもきくもくもろはるも長つねも若もあつ

はるもあつてはるもあつてはるもあつてはるも



今更におしめし行なはるる事

源為成

とる所は後ろきよとて申す神は海中にありて

對馬守小槻のあきみらとてありけり

今更におしめし 為政卿下

はなはたしき事なりとていふ事あり

後頼朝下伊勢乃らわゆる事あり出たら

る事あり 宗茂卿下

伊勢乃海をわたるにいらる事あり

源朝宗卿下

まはつとて我方よりをば海より下宿をいと夜君に

白く語り申す事あり

中絶言國信

今更におしめし行なはるる事あり

藤原基俊

秋常乃らりて我方の君よりとて思ふ事あり

披者仲節下陸奥へまらけり人々を餓し

事あり 藤原実理卿下

人々を餓し事ありとて思ふ事あり

藤原有定

藤原公家の人をいかにあはれむべきかを思ふべし  
経平ははなはだいかにあはれむべきを思ふべし  
公實のいかにあはれむべきを思ふべし

中絶言通後

とらむる朝の君を思ふべしとて少く月我を思ふ  
也

春言おまへに

朝のいとも月を思ふべしとて少く月我を思ふ  
陸奥國へまゐり守らぬ相坂乃開らぬ

つとむべし

被則光朝

つとむべしとて思ふおまへにまゐり守らぬ相坂乃開らぬ  
つとむべしとて思ふおまへにまゐり守らぬ相坂乃開らぬ

金葉和評集卷第七

意上

二月ある夕にさかたの女はあはれはるる

小保院

あふりに神のまはるるもあはれはるる

女あはれはるる

たけの資頼

あふりにさかたの女はあはれはるる

曉意の女はあはれ

神祇伯孫仲

あふりにさかたの女はあはれはるる

はあはれはるる

まきと女公實

あふりにさかたの女はあはれはるる

歌季の家はあはれはるる

あはれ

藤原歌集

あふりにさかたの女はあはれはるる

あはれはるる

源雅光

あふりにさかたの女はあはれはるる

後二位藤原親子家皇子合、嘉乃成らる

よしと

直源は

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

大宰大貳長實

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

よしと

津守國基

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

中細言雅言

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる嘉乃成らるる

宇山島漢の事

源師俊朝

水子の事  
奇愛意

右兵衛尉實能

着

中納言實能

中納言

中納言

源師俊朝

源師俊朝

あ

源師俊朝

中納言實能

谷川

對川

藤原基光

ま

源師俊朝

は

物

長實の母  
藤原知房卿

おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは

長實の母

おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは

おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは

實行の家評合意乃父をよめ

長實の母

おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは

藤原道隆

おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは

おぼけの母

おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは

皇太后

おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは  
おぼけを教むる方よしと申すは

藤原道隆

馬  
女乃  
結  
藤原政尚卿下

意  
方  
藤原政尚卿下

家  
後  
藤原政尚卿下

後  
源  
藤原政尚卿下

坊  
後  
藤原政尚卿下

心  
藤原政尚卿下

心  
藤原政尚卿下

心  
藤原政尚卿下

心  
藤原政尚卿下

心  
藤原政尚卿下

心  
藤原政尚卿下

太宰大貳長實

御書  
御書  
御書

相摸

田信の家又評今  
御書

源俊賴御下

御書  
御書

御書  
相摸

御書  
御書

梅季通

御書  
御書

神祇伯政伴

御書



人を招くは事

藤原惟規

海にわたる若くしはもたれ物よりかき置  
さしとくくしとくしとくしとくしとくしとくし  
つとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
相模

あつとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
女つとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
福つとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
梅つとくしとくしとくしとくしとくしとくし

藤原山家朝臣

秋風はくさくさ昔もあつとくしとくしとくし

かきとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
つとくしとくしとくしとくしとくしとくし

藤原有教母

あつとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
長實つとくしとくしとくしとくしとくしとくし

藤原志隆

はつとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
人つとくしとくしとくしとくしとくしとくし

藤原惟規

あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに

市林宮造

あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに

市林宮造

あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに

市林宮造

あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに

市林宮造

あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに

市林宮造

あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに

市林宮造

あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに  
あつたに

市林宮造

人海の心は静かに

白河の舟家数中

約し其の心は静かに思ふことあり  
静かに

律神 實源

我が心は静かに思ふことあり  
皇居の義濃

接官の意は静かに思ふことあり  
接官の意は静かに思ふことあり

攝政左大臣

我が心は静かに思ふことあり

増の院内時豊書合よはしむことあり

皇居の義濃

我が心は静かに思ふことあり

我が心は静かに思ふことあり

義濃

我が心は静かに思ふことあり

攝政左大臣

Handwritten cursive text, likely a signature or name, written vertically on the right side of the page.

藤原為忠

Handwritten cursive text, likely a signature or name, written vertically on the right side of the page.

源雅光

Handwritten cursive text, likely a signature or name, written vertically on the right side of the page.

源雅光

Handwritten cursive text, likely a signature or name, written vertically on the right side of the page.

源雅光

Handwritten cursive text, likely a signature or name, written vertically on the right side of the page.

源雅光

Handwritten cursive text, likely a signature or name, written vertically on the right side of the page.

源雅光

Handwritten cursive text, likely a signature or name, written vertically on the right side of the page.

大中治の長朝

高徳くはなむとておのむらひのむらさき  
しるれらうきりくはあやうしあまきつ  
藤原公教

しるれらうきりくはあやうしあまきつ  
後志の家はくはあまきつ  
雖来不箇意とてしるれらう

源後頼朝

おのむらさきつるれらうきりくはあまきつ  
女を望むとてしるれらう

喜三郎の歌

おのむらさきつるれらうきりくはあまきつ  
重殿しるれらうきりくはあまきつ  
おのむらさきつるれらうきりくはあまきつ

梅後宗女

おのむらさきつるれらうきりくはあまきつ  
藤衣おのむらさきつるれらう  
思ふ

落中宮上総

おのむらさきつるれらうきりくはあまきつ  
皇居を女別當

きよひるひのちかぎのちかぎのちかぎのちかぎのちかぎ

意下

藤原

藤原

金葉和評集巻第八

意下

初意はさうなり

藤原

かたはれなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほ  
なほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほ  
三つ部をへるなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほ  
なほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほ  
三の部をへるなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほ

藤原範永

意にふくみしをば松の成りしをばらんとては揚子  
後朝意をばらんとては

源朝後朝

其のちりきりしをばらんとては揚子  
其一月増意をばらんとては

内大臣

其のちりきりしをばらんとては揚子  
其のちりきりしをばらんとては

藤原朝後朝

其のちりきりしをばらんとては揚子  
其のちりきりしをばらんとては

鳥羽後朝合し意をばらんとては

藤原朝後朝

其のちりきりしをばらんとては揚子  
其のちりきりしをばらんとては

中納言雅定

其のちりきりしをばらんとては揚子  
其のちりきりしをばらんとては

右兵衛督伊弉

其のちりきりしをばらんとては揚子  
其のちりきりしをばらんとては

よきれ

大宰大貳長實

みらせのちかき世のまゝに  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ

権信正永縁

たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ

隆源正縁

源家時  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ

あかき縁

たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ

隆源正縁

たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ

あかき縁

たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ  
たしむる人の言はれ

都芳門院根合の意なり



田原道隆

高俊の御書に云くは、  
人々の御書に及ばざるは、  
御書に云くは、

藤原公成

御書に云くは、  
御書に云くは、  
御書に云くは、

大宰大貳長實

御書に云くは、  
御書に云くは、  
御書に云くは、

藤原公成

御書に云くは、  
御書に云くは、  
御書に云くは、

源朝長

源後頼朝

御書に云くは、  
御書に云くは、  
御書に云くは、

源朝長

御書に云くは、  
御書に云くは、  
御書に云くは、

源朝長

御書に云くは、  
御書に云くは、  
御書に云くは、

何れもあはれなるに

藤原永實

あはれなるに母の思ふは我の思ふに

あはれなるに

藤原永實

あはれなるに母の思ふは我の思ふに

あはれなるに

中御門信

あはれなるに母の思ふは我の思ふに

あはれなるに

あはれなるに母の思ふは我の思ふに

大納言経信

あはれなるに母の思ふは我の思ふに

藤原忠隆

あはれなるに母の思ふは我の思ふに

あはれなるに

枝原宗女

あはれなるに母の思ふは我の思ふに

あはれなるに

藤原院信

あはれなるに



攝政大臣家へ書の内容は

源雅光

若くはあつた御事なすむる物に  
しるす事なすむる事なすむる事  
なすむる事なすむる事

市村宗甲

しるす事なすむる事なすむる事  
なすむる事なすむる事なすむる事  
なすむる事なすむる事なすむる事

板後宗女

しるす事なすむる事なすむる事

しるす事なすむる事

しるす事

しるす事なすむる事なすむる事  
なすむる事なすむる事なすむる事  
なすむる事なすむる事なすむる事

中原章経

しるす事なすむる事なすむる事  
なすむる事なすむる事なすむる事

市村宗甲

あはれなる御書に御返事申上り候へば

大納言 経信

女中 藤原 氏

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

氏 氏 氏 氏

藤原 氏

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

源 氏

藤原 氏

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

あはれなる御書に御返事申上り候へば

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

藤原 氏

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

藤原 氏

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

藤原 氏

御返事申上り候へば御返事申上り候へば

人 6000 へ 4000 へ 2000 へ 1000 へ

みまのしほりき 藤原の源氏

人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ

皆の位階 丹波書合 1000 へ

中納言後藤

人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ

一官 紀伊

人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ  
人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ  
人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ  
人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ

攝政家 藤原

人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ

人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ

侍従

人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ

國信の家 源氏 1000 へ

源氏

人 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ

子の初 1000 へ 500 へ 250 へ 125 へ

かきしめいしめいしめい

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

藤原政房

あはれなる御心御座り候へば  
御座り候へば御座り候へば

源信宗朝

あはれなる御心御座り候へば  
御座り候へば御座り候へば

藤原永實

あはれなる御心御座り候へば  
御座り候へば御座り候へば

一宮純仁

あはれなる御心御座り候へば  
御座り候へば御座り候へば

河野右大臣

あはれなる御心御座り候へば  
御座り候へば御座り候へば

皇太子

あはれなる御心御座り候へば  
御座り候へば御座り候へば



右京老翁集

人... 神... 老翁...

中平... 集

人... 集... 中平...

僧部公圖

人... 僧部... 公圖...

人... 集...

人... 集... 右京...

人... 集...

人... 集... 右京... 老翁...

Handwritten text at the top of the left page.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text in the middle of the left page, possibly a section header or a specific note.

Continuation of handwritten text on the left page, following the middle section.

Handwritten text in the middle of the left page, another section header or note.

Continuation of handwritten text on the left page, ending with a long horizontal line.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

何物者(歌)

此作一巻より信乃吉之りてあまのまへに若狭のりて  
歌

春宮女公母

春宮女公母の御入申す事は  
歌

春宮女公母の御入申す事は  
歌

内大臣家史

内大臣家史の御入申す事は  
歌

攝政方大臣家史の御入申す事は  
歌

源氏國記

源氏國記の御入申す事は  
歌

源後賴朝

源後賴朝の御入申す事は  
歌

源行朝臣

源行朝臣の御入申す事は  
歌

後

おろしきるよもつたに

源後頼朝

おろしきるよもつたに  
おろしきるよもつたに

金葉和歌集卷第九

歌詠

ひうー道方ゆくはくはうす  
安樂のよもつたに  
ひうすのよもつたに  
おろしきるよもつたに

大納言鍾信

おろしきるよもつたに  
山家集のよもつたに

攝政左大臣

源行宗朝

源行宗朝

源行宗朝の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に

仁和寺

仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に

仁和寺

仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に

仁和寺

仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に  
仁和寺の御書に

源定信

みま人の吉野の山乃はく我の身は若くは  
信三保の心はく我の心はく我の心はく  
みまの心はく我の心はく

右近衛基泰書方

いふはく我の心はく我の心はく  
信三保の心はく我の心はく  
みまの心はく我の心はく

右中井伊家

いふはく我の心はく我の心はく  
信三保の心はく我の心はく  
みまの心はく我の心はく

右中井伊家

藤原惟信

いふはく我の心はく我の心はく  
信三保の心はく我の心はく  
みまの心はく我の心はく

藤原惟信

いふはく我の心はく我の心はく  
信三保の心はく我の心はく  
みまの心はく我の心はく

平家朝臣

源氏物語

平家朝臣の御事  
藤原基母の御人  
平家朝臣の御事

源氏物語

平家朝臣の御事  
藤原基母の御人  
平家朝臣の御事  
藤原基母の御人  
平家朝臣の御事

源氏物語

平家朝臣の御事  
藤原基母の御人  
平家朝臣の御事

源氏物語

平家朝臣の御事  
藤原基母の御人  
平家朝臣の御事

源氏物語

平家朝臣の御事  
藤原基母の御人  
平家朝臣の御事

源氏物語

Handwritten text in cursive script, likely a signature or name.

源 瑞 光

Handwritten text in cursive script, possibly a date or a short note.

平 康 貞 女

Handwritten text in cursive script, possibly a date or a short note.

曾 公 心

Handwritten text in cursive script, possibly a date or a short note.

藤 原 正 家

Handwritten text in cursive script, possibly a date or a short note.

指 持 隆 慶 記

Handwritten text in cursive script, possibly a date or a short note.

Handwritten text in cursive script, possibly a date or a short note.



僧部頼基光の子一法師の御名  
よき御名に御座りて

梅純也

よき御名に御座りて

也  
僧部頼基

からみ西の御名に御座りて

郁芳の御名に御座りて  
よき御名に御座りて

源仲也

源仲の御名に御座りて

源仲の御名に御座りて

源仲の御名に御座りて

源仲の御名に御座りて

源仲の御名に御座りて

攝津

源仲の御名に御座りて

也  
源仲

源仲の御名に御座りて

源仲の御名に御座りて

源仲の御名に御座りて

明くは福の影にあらはれぬとて  
伊勢國の女を愛せしむる

大申位補正

玉のついでに女を愛し  
宮治本古殿大信布の愛を  
いかに愛せしむる

大誌言経傳

あまのこゝろを  
いかに愛せしむる

あまのこゝろを  
いかに愛せしむる

黒子殿の  
いかに愛せしむる  
いかに愛せしむる  
いかに愛せしむる  
いかに愛せしむる

藤原惟規

秋のついでに女を愛し  
能方門は伊勢の女を愛し  
いかに愛せしむる  
いかに愛せしむる  
いかに愛せしむる

大塚右衛門尉

この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、

平康宮女

この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、

平康宮女

この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、

この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、

平康宮女

この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、

この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、  
この文は、入心は、信長が、

花

娘

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

経邦書人歌集

こころの夏をわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

系注師頼

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

系注師頼

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

和泉式部

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

あま井の心もわらわらしたるに  
百の河の中よ夏の夜に

わがまゝに  
あつては  
あつては  
あつては

藤原時房

わがまゝに  
あつては  
あつては  
あつては

藤原時房

わがまゝに  
あつては  
あつては  
あつては

桐模

わがまゝに  
あつては  
あつては  
あつては

藤原時房

ふらふらと云ふは、  
例あまの事なす、  
甘子と云ふは、

堀江本

はくは、  
あや

僧正行傳、  
あつ

大絶言宗

草枕、  
あつ

櫻井店

後冷泉院、  
あつ

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

源氏物語

内大臣家越後

源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに

源氏物語の巻の初めに

源頼家物語

源頼家の物語

源光頼母

源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに  
源氏物語の巻の初めに

源後頼朝



さきかきしるはかきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは  
大勢の神也  
同くもしるはかきかきしるはかきかきしるは  
僧正の書

乃一人神して目してはかきかきしるはかきかきしるは  
さきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは  
あつちかきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは  
いさかき  
かきかきしるは

美しきはかきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは  
堀の浅海の中かの女房からと申仲實

此伊守のいさかきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは  
いさかきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは

落中三甲斐

保實のいさかきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは  
乃かきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは  
かきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは

藤原實信母

いさかきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは  
乃かきかきしるはかきかきしるはかきかきしるは

源師賢卿

西のくまの道もある物をひらき入りし方端の月  
板為仲刻下陸奥書よりありて物をも  
任しありてあり

藤原隆資卿

中河我の長半よりありてわすれし  
古の地へ入るるも  
いふはあり

藤原實光卿

いふはあり

屏風乃繪し

ぬきかき

藤原家範卿

いふはあり

いふはあり

いふはあり

皇太后美濃

いふはあり  
上場人若家多ク亦若老と

源雅光

いふはあり

源氏物語の細長とついでに

源氏物語

源氏物語の細長とついでに...  
さしつかへなく...  
まもなく...  
はなはだ...  
いかに...  
いかに...  
いかに...

僧正行傳

僧正行傳の...  
大中...  
行...  
まもなく...  
その義...  
六條...  
し...  
つ...  
つ...  
つ...  
つ...

字法平一書に於ては、  
一、是の如き事あり

徳政

字法平一書に於ては、  
家一人

因防也

字法平一書に於ては、  
賀茂成助  
一、

津守國基

字法平一書に於ては、  
賀茂成助  
也

字法平一書に於ては、  
皇居宮内閣後、  
西乃細屋上等なる人、  
更なる事あり、  
字法平一書に於ては、  
右の如き事あり、  
皇居宮内閣

字法平一書に於ては、  
右の如き事あり、

大原行陣書入り

一

天谷守正

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

一

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

たのむるはかたじけなくも  
いづれかたじけなくも

源頼朝

いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも

藤原公教

いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも

源頼朝

いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも  
いづれかたじけなくも

金葉和語集卷第十

雜詠下

公實のこれゆゑに梅は家より梅りて  
梅花よりおとさるるさきとて梅し  
川とて

藤原基経

しつとあはれりし梅の心は我の心  
也

中納言實行

福よとておとさるる梅の心は我の心  
人におとさるる梅の心は我の心  
おとさるる梅の心は我の心

らうとておとさるる梅の心は我の心

平基経

梅の心は我の心は我の心  
後三條院の梅の心は我の心  
乃梅の心は我の心は我の心  
梅の心は我の心は我の心

藤原有佐理

あはれとておとさるる梅の心は我の心  
小方とておとさるる梅の心は我の心

らうとて

藤原右大臣







あつたてのていふこと

藤原賢子

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

和泉武部

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

あつたてのていふこと

平家盛

あつたてのていふこと





あはれなる

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる  
依釋如遺教云弥隆とくもなるよき

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

清海聖人のあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

普賢乃中教文のあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなる

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる





田原守忠

昔の義の心をかへて  
しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを

連歌

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを

しるすは井のちからを  
しるすは井のちからを

しるすは井のちからを



心絶海乃梅を交わす

賀茂の社ありてはくそこの一に

神主成助

古絶乃ららふとておのれ

行重

心絶海乃梅を交わす

賀茂の社ありてはくそこの一に

僧正徳海

古絶乃ららふとておのれ

心絶海乃梅を交わす

心絶海乃梅を交わす

日乃入を

親置徳海

心絶海乃梅を交わす

平為成

心絶海乃梅を交わす

心絶海乃梅を交わす

永源徳海

心絶海乃梅を交わす

永成徳海

心絶海乃梅を交わす

かゝる御事なれば

申上り候へども

助後

申上り候へども

申上り候へども

為助

申上り候へども

國清

申上り候へども

申上り候へども

申上り候へども

申上り候へども

頼經

申上り候へども

信經

申上り候へども

申上り候へども

申上り候へども

申上り候へども

匡房

いふことなるはしるはあはれなること

和泉武敏 賀茂 一 なるはしるはあはれなること  
あはれなるはしるはあはれなること

和泉武敏

いふことなるはしるはあはれなること

和泉武敏

いふことなるはしるはあはれなること

源頼光 但馬守 中 なるはしるはあはれなること  
一 なるはしるはあはれなること  
なるはしるはあはれなること

いふことなるはしるはあはれなること

いふことなるはしるはあはれなること

源頼光

いふことなるはしるはあはれなること

いふことなるはしるはあはれなること

相模母

いふことなるはしるはあはれなること

いふことなるはしるはあはれなること

いふことなるはしるはあはれなること

源頼光

かせる事なくしてはたわらざる

はまじき事なくしてはたわらざる

すれはせざる事なく

ふん

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

律の慶靴

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

ふん

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

いふ事なくしてはたわらざる

頼母は

源後賴朝

源賴朝

源賴朝

源賴朝

源賴朝

源賴朝

源賴朝

源賴朝

源賴朝

源後賴朝

源賴朝

源賴朝













